れんげプロジェクト　～れんげで地域を元気に～

中央市　×　農業法人たとみ農園

取組概要

古くから稲作が盛んな中央市では、化学肥料が無かった昔はれんげを緑肥として活用する農家が多く、春はれんげの花が辺り一面に広がっていた。今では衰退してしまったれんげを活用した自然農法を復活させ、SDGsの推進と地域活性化につなげるため、中央市と市内の農業法人たとみ農園が協働で田んぼにれんげを咲かせる「れんげプロジェクト」を令和3年度から開始した。

れんげで遊ぶ近所の子ども（R4年春撮影）

中央市オリジナルのSDGsロゴマーク

基本情報

代表地方公共団体	中央市
代表民間団体	農業法人たとみ農園
他の連携団体等	株式会社アドヴォネクスト、大学法人山梨大学
カテゴリ	環境保全対策／都市景観整備／農林水産業振興
事業費	
めざすSDGsゴール	
事業化までの期間	1年

取組内容

児童館で開催したれんげ種まきの説明会

れんげのサンプル採取をする山梨大学の学生

この取組で解決した課題	■化学肥料を極力使わない自然農法の推進 化学肥料の中には、プラスチックでコーティングされた皮膜肥料というものがあり、その皮膜が用水路から河川へ流出しいずれは海に到達しマイクロプラスチック等の問題になる可能性が指摘されている。れんげは根に窒素分を蓄える性質があるため、緑肥として活用することで化学肥料を削減することができる。また、れんげを咲かせた田んぼで採れた米と通常の米の食味や生産量の違いを調査し、れんげを活用した自然農法が「米の付加価値」となるか、持続可能なものかを検証している。 ■蜜蜂の繁殖の手助け 植物の受粉を助ける蜜蜂は、実は豊かな森や自然環境を形成するために欠かせない生き物。しかし、農薬や環境の変化に弱く年々その数を減らしている。田んぼにれんげを咲かせたところ、多くの蜜蜂が採蜜にやってくるようになり、中には特に希少な日本蜜蜂の姿も見られた。
解決に向けた手法	■れんげの種まき 市内で休耕田の活用に取り組む「農業法人たとみ農園（親会社：株式会社アドヴォネクスト）」と協働で、令和3年11月に東京ドーム1個分の田んぼにれんげの種まきを実施。2年目の令和4年は11月に市内児童館に通う児童約100人とれんげの種まきを実施。 ■れんげから乳酸菌・酵母を抽出 令和4年4月、大学法人山梨大学のワイン研究センターと協働で、田んぼに咲いたれんげから乳酸菌と酵母を抽出する実験を開始。抽出された乳酸菌・酵母を使った新たな特産品の開発を進めている。

取組詳細

事業推進上の各団体の役割分担	■中央市 SDGs推進のため、若手職員がれんげプロジェクトを立ち上げ、ふるさと納税の寄附メニューに「SDGs推進」を新設し資金調達。 ■農業法人たとみ農園 管理する圃場に市と協働でれんげの種を撒き、れんげが咲く田んぼで採れた米の特産品化・高付加価値化に向けて取り組みを進めている。 ■大学法人山梨大学 れんげの成分から乳酸菌・酵母を抽出する研究を実施。
地域関係者との連携方法	市内児童館に通う児童約100人にれんげの種まき体験を実施。市に愛着を持ってもらい、れんげが咲く田園風景を写真に撮って発信していただくため。コロナ終息後は米の試食会も計画している。
資金調達方法	事業費は全額、中央市ふるさと納税寄附金から拠出。
資金調達方法の補足	
事業推進上の課題・工夫	化学肥料を減らしてれんげを咲かせるだけでは地域の振興にはならないため、れんげをきっかけに、米の付加価値の創出や、新たな特産品の開発（れんげ由来の乳酸菌・酵母を使った製品）を同時に進めている。 より多くの方に知ってもらうため、中央市のオリジナルSDGsロゴマークとして、れんげプロジェクトのロゴマークを作成し、PRに活用している。

担当者のコメント

れんげプロジェクトは令和3年度から始めた取り組みで、今は中央市、農業法人たとみ農園、山梨大学が主要なステークホルダーだが、新聞等にれんげプロジェクトの取り組みの記事が掲載されるたびに市内外の関係機関から「協力したい」「一緒に何かやらせてくれないか」というお声をいただいている。

令和4年度からは地域の子どもたち（児童館の児童）がステークホルダーに加わるため、みんなで楽しみながらSDGsを推進していけたらと考えている。

プロジェクトメンバー（市の若手職員）

優良事例応募項目

取組のポイント（3つの視点）	①地方創生SDGsの視点 化学肥料を緑肥（れんげ）に置き換え、自然農法を推進することで、マイクロプラスチックの抑制および生き物（日本蜜蜂等）の多様性を存続させることができる。また、れんげ由来の乳酸菌・酵母から市の新たな特産品を開発し、地域振興につなげることを計画している。 ②ステークホルダーとの連携 休耕田解消に取り組む農業法人たとみ農園と連携し、れんげをきっかけに自然農法の推進や休耕田の抑制をはかり、さらに山梨大学との共同研究により、れんげから新たな価値を生み出すことを目標としている。そして、地域の子ども達にれんげが咲く地元の風景を誇りに感じてもらい、自発的に発信してもらえるような街を目指している。 ③モデル性・波及性 休耕田問題や農業の担い手不足は、全国的な課題となっている。自然農法やれんげ由来の特産品開発を切り口に、新たな農業の担い手が移住してくれたり、地域の子どもたちが成長して将来の職業として農業を選んでくれるような活気のある街にしていきたい。れんげは中央市の「市の花」となっているため採用したが、マメ科の植物（例：クローバー等）であれば緑肥として活用できるので、それぞれの市町村のゆかりの植物で自然農法を行うことが可能。